「子どもはみんな問題児。を読んで」

熊田　千尋

この度、この本を読んだことで、子どものあり方、見方、受け止め方を改めて考え、自分の保育を見つめ直すきっかけとなった。そして、これまで中川李枝子さんの優しく、ほっこりとする絵本の数々に触れてきたが、この本を通じて、中川さんの人柄や考えを知り、だからこそ、あんなに素敵な物語が描けるのだなと中川さんの魅力をより一層感じた。

　読み終えて、どんなことにも自分自身も楽しむこと、いつでもゆったりとした気持ちを持っていることが子どもたちと関わる上で一番大切なことなのだと改めて思った。このことは、私が１年目の補助時代にも先輩方の保育から実際に感じ、学んだことであり、自分の保育の目標となっていたことである。なので、中川さんのひとつひとつの言葉が、とても心に響いたし、自分の中にすっと入ってきた。実際保育をしていると、十人十色である子どもたちへの保育は悩みが尽きないし、つい焦りや余裕がなくなってしまうこともある。お家の方も、「きちんと」や「しっかりと」を重要視しすぎてしまうところがある。子どもの観点に寄り添い、一緒に楽しんでいくことをもっともっと心掛けて、大人が柔軟さを身につけること、そして、大人も子どもも力を抜けられる環境をつくることが必要だと思った。その為には、お家の方にも知っていただけるように、私たちがいろいろな方法を試し、示していき、子どもたちの姿や関わり方をより一層伝えていけるようにしたいと思った。

　また、遊びや絵本においても改めて考えられた。「保育のポイントはどうやって遊ばせるか」「想像力豊かな子は遊び上手」という言葉は印象的である。遊びを繰り広げるために、発展させていくために、保育者の働きかけは本当に重要だと思う。今年の夏期保育の際、日焼けをしている子が思ったより少なく、最近は、遊べない子、外遊びから離れがちな子が特に多いように感じられる。なので、様々な経験をし、子どもたちを充実した遊びに導けるように、私も努力をしていきたいと思っている。絵本では、子どもたちの関心が変わってきて、今年のクラスの子どもたちからも「もっと読んで」という言葉が聞かれるようになった。「先生、この絵本大好きなんだ」と伝えると、嬉しそうに「お家にもあるよ」「私も好き」などの反応を返してくれる。この本を読んだことで、そういった何気なくしていた子どもたちとのやりとりも大事なことなのだとわかり、これからも子どもたちとの絵本の時間を大切にしていきたいと思った。

　いかに楽しんで保育をするか、どれだけ子どもが安心できる場所であり、発揮することができるか、子どもたちにとって良いものを選び、与えられるか。これからも、中川さんがおっしゃるようにいつも真剣勝負で子どもたち一人一人と向き合っていきたい。